興福寺

第１期境内整備事業にともなう発掘調査概報 Ⅱ

1999

興　福　寺

調査区全景（南東から中金堂を望む）

北面東回廊
（中金堂基壇から東をみる）

五七桐文金箔付き軒丸瓦

緑釉水波文塼

鬼面文軒丸瓦

序

興福寺では現在、奈良国立文化財研究所のご協力を得て、伽藍中心部の発掘調査を継続的に行なっている。当山ではこうした一連の調査によって地下遺構の規模等を確認しながら、国の史跡指定を受け更に世界文化遺産に登録されている境内を整備し、かつ近い将来、天平時代の典雅な文化空間を再構成したい考えである。

さて、今回の調査は、平成10年に実施した中門跡ならびに回廊取付き部分の発掘につづくもので、中金堂前庭部分および東面・北面回廊などをその範囲として行なった。

今回の発掘調査でも、回廊の規模の解明のほか中金堂基壇前面部の石敷き舗装の発見、平城京の条坊にかかわる側溝の発見、あるいは、秀吉ゆかりと推定される金箔瓦の出土など、前回同様かずかずの学術的に貴重な知見を得た。

本書は、そうした調査結果を「第１期境内整備事業にともなう発掘調査概報II」として、関係機関ならびに広く興福寺に関心を寄せられる江湖の方々に報告するものである。

平成12年３月

興福寺貫首　多 川 俊 映

目　次

序
目　次
1　調査の経過と概要　3
2　中金堂院の歴史と回廊の建築　4
3　発掘調査の成果　7
　(1)　中金堂院回廊　7
　(2)　中金堂前庭部　10
　(3)　東僧房付近　13
　(4)　回廊造営以前の遺構　13
4　出土遺物　14
　(1)　瓦塼類　14
　(2)　金属製品・銭貨　18
　(3)　土器　20
5　成果と課題　21
　(1)　本調査で得られた成果　21
　(2)　回廊の創建形態について　22
　(3)　２条の東西溝の解釈　24
報告書抄録　26

例　言

1．本書は、「興福寺境内整備構想」にもとづいて進められている、第１期境内整備事業（1998～2007年度）にともなう1999年度の発掘調査概要報告書である。

2．調査は、興福寺の委託を受けた奈良国立文化財研究所 平城宮跡発掘調査部が、1999年10月４日から2000年２月16日にかけて実施した。

3．調査は、高瀬要一・千田剛道・玉田芳英・箱崎和久・山下信一郎・清水重敦が担当し、安村 健（帝塚山大学大学院）が参加した。また、石質の調査・石材の保存処理には、肥塚隆保・高妻洋成があたった。

4．調査ならびに本書の編集に際しては、奈良県教育委員会、奈良市教育委員会、東京国立博物館、京都国立博物館、奈良国立博物館、国立歴史民俗博物館、岩波書店、㈱国際航業、中造園の協力を得た。

5．本調査は、平城宮跡発掘調査部の第308次調査として実施したもので、各遺構には平城京左京における調査基準に従い一連の番号を付した。発掘遺構図等の座標値は、国土方眼第Ⅵ座標系による。

6．本書の作成は、当調査部部長・田辺征夫の指導のもと調査員全員があたり、全体の討議をへて出土遺物および成果と課題の項を分担執筆とし、他の項の執筆と編集は箱崎和久がおこなった。

7．遺構・遺物の写真は、牛嶋 茂・中村一郎・杉本和樹および箱崎が撮影した。

8．図面作成・編集作業の補助には、北野陽子、小倉依子、土井智奈美、宮崎美和、今津朱美、関広尚世、石井咲子、笠井可奈があたった。

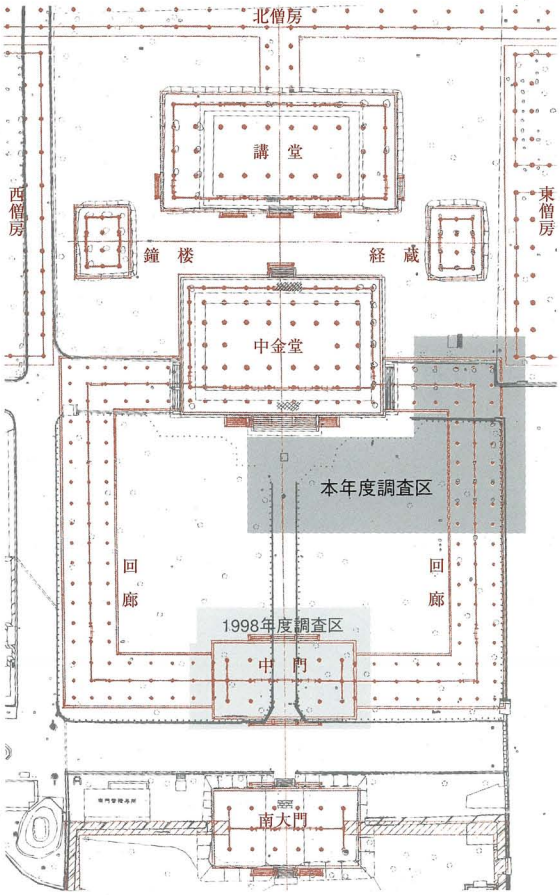
1　調査の経過と概要

本調査は、昨年度の中門跡に引き続き、興福寺境内第１期整備事業による第２年次にあたる。発掘区は東西55ｍ×南北19ｍの長方形平面に東西22ｍ×南北20ｍを突出させたL字型をなし、中金堂と中門をむすぶ回廊の北東隅と、中金堂前庭部、さらには東僧房*)の南西端を含む面積約1,485㎡について調査をおこなった。調査区内には回廊の礎石が16石のこり、また、境内各建物に対する防災用配管の埋設にともなう事前発掘調査の成果（『興福寺防災施設工事・発掘調査報告書』1978)、さらには昨年度におこなった中門跡の調査成果などをみても、遺構の遺存状況は良好であろうと期待された。こうして1999年９月には、調査区内にある樹木の伐採やU字溝・間知石組の排水溝の除去をすませ、10月５日から作業員を投入した発掘調査を開始したのである。発掘面積は当初1,210㎡であったが、東面回廊棟通りで検出した凝灰岩製地覆石列SX7501の南延長部分の状況をあきらかにするため、また次年度以降の調査計画をも鑑みて、南辺部を５×55ｍにわたって拡張した。全体の調査経過は下表を参照されたい。遺構は、北面回廊および東面回廊の北方では現地表直下の地山面で検出し、そのほかは、おおむね興福寺造営時と考えられる整地土上面で検出した。

第１表　調査経過

９月14日	現地打ち合わせ。発掘区設定。
９月16日	発掘前状況写真撮影。
９月24日	樹木伐採・抜根。排水溝除去（～25日)。
10月４日	現場設営・器材搬入。地区杭設定。
10月５日	東方から掘削開始。明治期築地SA7620・7621検出。
10月15日	北面回廊北雨落溝SD7516を検出。 東西溝SD7610を検出。
10月25日	東面回廊棟通りで凝灰岩製地覆石列SX7501を検出。
10月26日	中金堂の南で玉石敷きと燈籠台石を検出。
10月29日	調査区を南に５ｍ（×55m）拡張。
11月９日	前庭部より金箔付き軒丸瓦出土。
11月16日	興福寺境内整備委員会開催。
11月19日	明治期築地写真撮影・実測（～24日)。 東西溝SD7600を検出。
11月25日	礎石建物SB7533を検出。
11月29日	東面回廊西側基壇地覆石・雨落溝を検出。
11月30日	明治期築地を掘削し下層遺構の検出。
12月２日	記者発表。東僧房南側基壇地覆石SX7591を検出。
12月４日	現地説明会。聴衆約1,000人。
12月11日	クレーンによる垂直写真撮影。
12月13日	地上写真撮影（～14日)。
12月15日	平面実測開始（～2000年１月17日)。
１月13日	前庭部の遺構再精査。断割（断面観察）開始。
１月19日	石敷き南に掘立柱東西塀SA7540を検出。
１月26日	礎石個々・前庭部の地上写真撮影。
２月２日	礎石の石質鑑定。凝灰岩地覆石に強化剤を塗布。
２月７日	記録ビデオの収録。
２月８日	遺跡養生のための砂まき開始。
２月10日	器材の撤収。
２月16日	図面の最終確認。調査終了。

*) 興福寺の僧房は講堂の東、西、北にたち、平安初期以降、それぞれ東室（中室)、西室、北室と呼称されてきたが、ここでは『興福寺流記』に記載される「東僧房（坊)」という名称を使うこととしたい。なお、『興福寺流記』には「僧坊」、「僧房」のいずれの文字もみえるが、ここでは「僧房」を用いた。



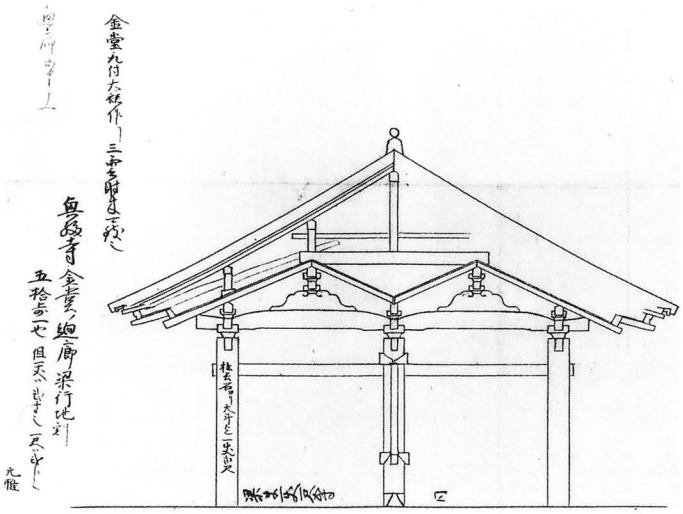
第１図　発掘調査位置図（１：1500)

2　中金堂院の歴史と回廊の建築

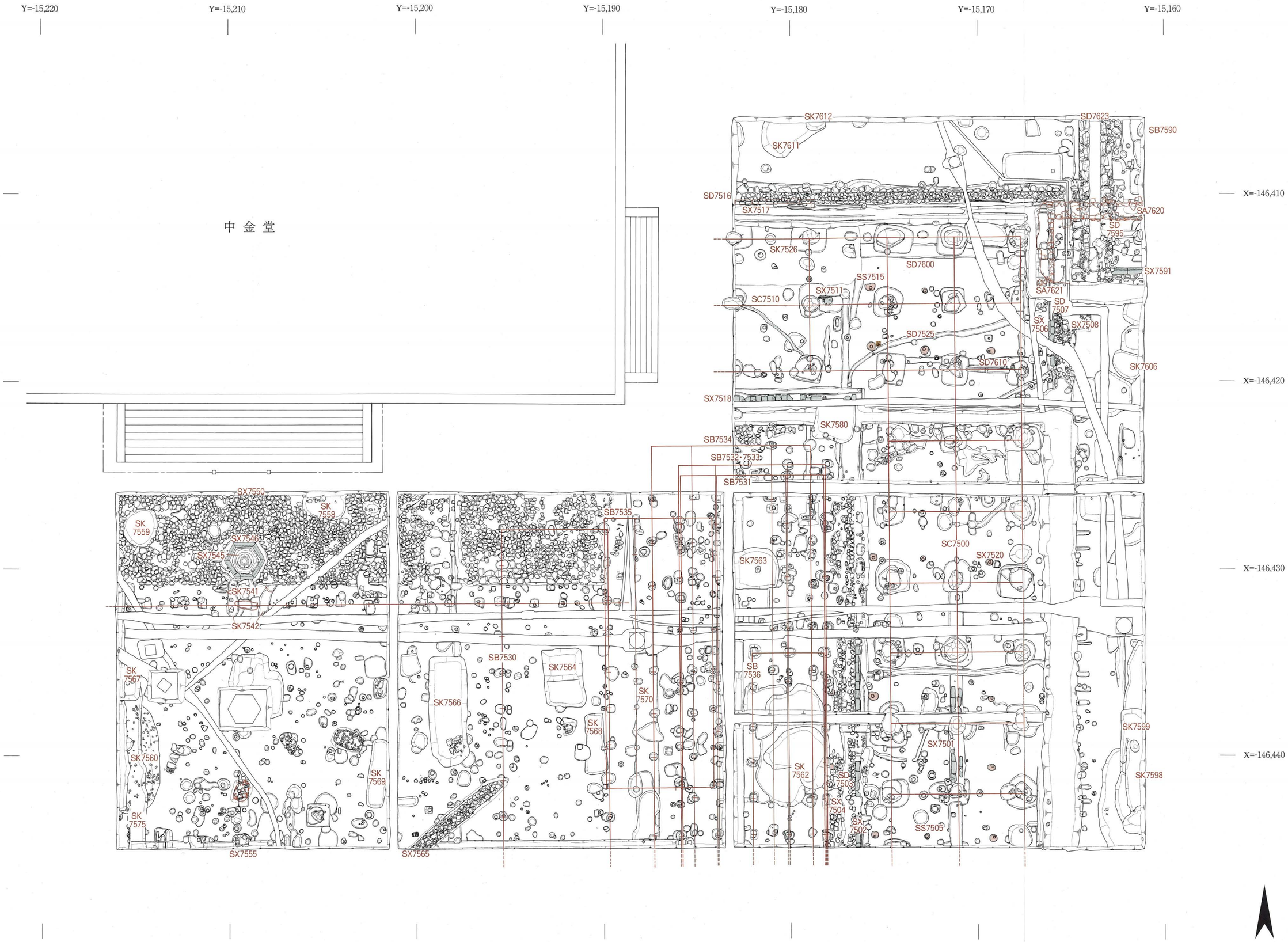
中金堂院の歴史　広く知られているように、山階寺を起源とする興福寺は、飛鳥の地に移って厩坂寺と号し、さらに和銅3年（710）の平城遷都によって、平城京の外京にあたる左京三条七坊の地に建立された。平城京における興福寺の創建については明確でない。興福寺の名が歴史上はじめて現れるのは、『続日本紀』養老4年（720）10月17日条の「始めて養民、造器および造興福寺仏殿の三司をおく」という記事だが、これを興福寺造営の端緒とは考えず、造営あるいはその計画が進んでいたときに、官寺として造営することが決まったことを示すものと理解する説が有力である。中金堂と中門をむすぶ回廊で囲われた区画を中金堂院とよぶ。創建以来、大災害とは無縁であったこの中金堂院一郭も、永承元年（1046）の火災をはじめとして、平安時代にこのほか3度（康平3年（1060）・永長元年（1096）・治承4年（1180））、鎌倉時代に2度（建治3年（1277）・嘉暦2年（1327））焼失する。藤原氏の氏寺として強大な力を有していた興福寺は、そのたびごとに再建を重ねてきたが、江戸時代の享保2年（1717）におきた7度目の火災の後は、南円堂が寛保元年（1741）に復興されたものの、中金堂仮堂がかろうじて文政2年（1819）に建てられただけで、回廊や中門はついに再建されなかった。

回廊の建築　回廊の建立は、中金堂とともにほぼ興福寺の創建当初頃と考えられている。『興福寺流記』は、「一　廊等。廊者廡也云云。宝字記云。中門東西各長九丈四尺并広二丈四尺云云。右天平記云。歩廊一条。南門左右各七間。東西各十七間。宝字記云。東西各廿二丈二尺。堂左右各六間。宝字記云。各長八丈云云。」と伝え、また中門の項には「（前略）延暦記云。（中略）四方各小門二門。宝字記云。小門八口云云。」とある。さらに柱数を記した記録や古絵図などから、回廊は複廊で、その柱間を扉とした小門が各面に2つずつ開くと考えられてきた。興福寺伽藍を復原した大岡實は、これらの文献だけでなく、現地での地上観察および遺存する礎石位置の測量成果などを加えて、回廊の柱間寸法を推定した（『南都七大寺の研究』1966）。しかし、東西面回廊における桁行方向の柱間寸法については、遺存礎石から考えられる規模が文献と整合しないことから、「後世柱間が変更された」と解釈しながらも、「将来の検討にまちたい」とむすんでいた。

ところで、東京国立博物館には『興福寺建築諸図』と一括された多数の建築図面が残る。そのなかに回廊の平面図（23ページ、第26図）と梁行断面図（第2図）がある。断面図は梁行2間（梁行寸法：一丈一尺五寸）の複廊を瓦葺きに描く。細部形態には古式を残す部分もみられ、享保焼失前の実測図という解釈（濱島正士「「興福寺建築諸図」について」『MUSEUM』461　1989）でよいだろう。つまり、嘉暦2年の焼失後に再興された回廊を描いたものである。享保焼失後は再建されないため、発掘調査によって、少なくともこの図と一致する遺構の検出が期待できた。なお、現存する春日大社本社回廊（17世紀初）は、この断面図とほぼ同じ構造をもつ。



第2図　『興福寺建築諸図』所収の回廊梁行断面図



第３図　発掘調査遺構図（１：200、中金堂基壇の位置は「興福寺境内現況図」（1995年作成）による）

3　発掘調査の成果

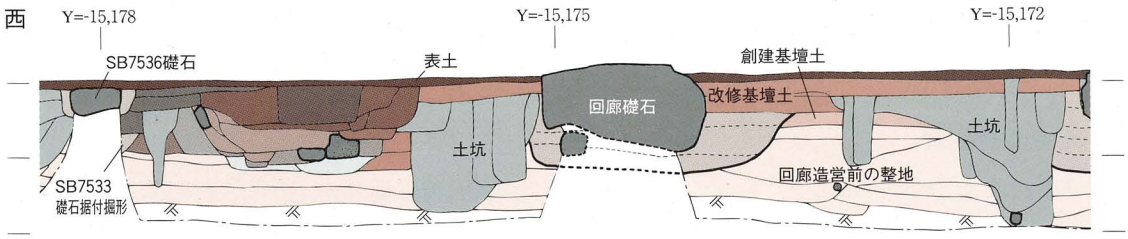
(1)　中金堂院回廊

回廊付近には、昨年度の調査において中門東半下部で発見した谷地形が、前庭部東北端に向けてのびている。これは北方へ行くにしたがって徐々に浅くなり、東面回廊北方および北面回廊付近ではバラス混じりの地山が現れる。本調査区における谷地形の最深部は南辺の東面回廊西端付近で、現地表面から約1.6ｍにおよび、谷を埋めた整地土を覆う灰褐色砂質土上に東面回廊基壇の版築を施している。この基壇版築土には焼土や炭を含まないため、創建当初のものと解釈した。また、この上層には、部分的に後世の基壇改修と考えられる土層も確認できる。一方、北面回廊の基壇は地山削り出しとする。

礎石は基壇上に16石残り、他の17ヶ所では汚れた暗灰色の砂質土を埋土とする抜取穴を検出した。ところが遺存する礎石のうち数ヶ所にも同様の埋土をもつ掘り込みがあり、これは抜き取るのを途中でやめた痕跡と解釈した。礎石および抜取穴の周囲には一辺が約1.4～2.0ｍの方形を呈する据付穴があり、深皿状の掘り込み最下部に人頭大の根石を入れて礎石を据えている。据付穴の埋土は数層に分層されるが、版築というには粗く、礎石を安定させる地業を施しているらしい。礎石は径0.9～1.2ｍほどの自然石で、現状では円形の造り出しや出枘の加工を施した痕跡はみられない。石質はほとんどが三笠安山岩で、中金堂にちかい北面回廊西端部の２石は花崗岩である。礎石の据付穴は大部分の箇所で１回しかなく、火災による割裂などによって据え替えた礎石のほかは、創建当初のまま使用してきたと考えてよい。礎石上面の標高は、本調査区における東面回廊南端部で95.6ｍ、北面回廊西端部で95.9ｍであり、中金堂付近がもっとも高い。

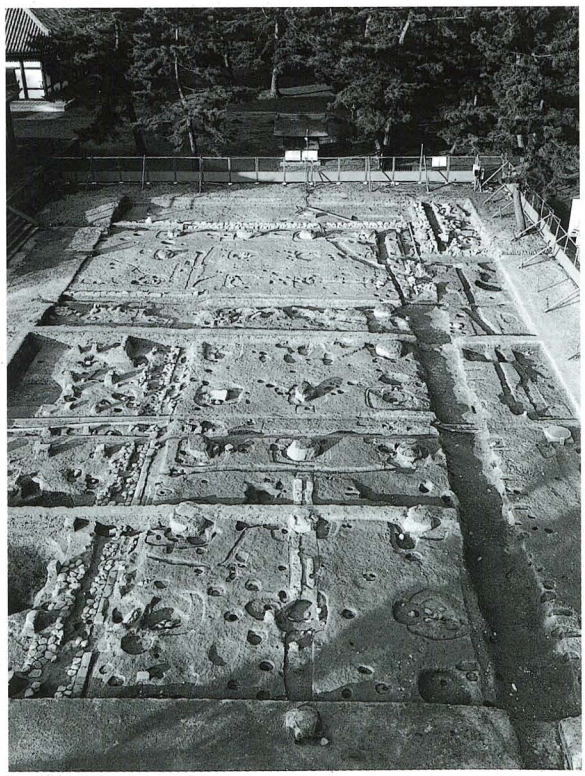
北面回廊SC7510　現地表下約10㎝で遺構検出面である地山に達する。標高の最も高いのは中金堂に近い西端部で、約95.5ｍである。南北両側の基壇外装は現代の排水溝によって破壊されているが、北側

第４図　回廊部分全景（北西から）



第５図　東面回廊基壇断面図（X＝-146,438.3付近の東西あぜを南からみる　縮尺１：50　ページ境一部重複）

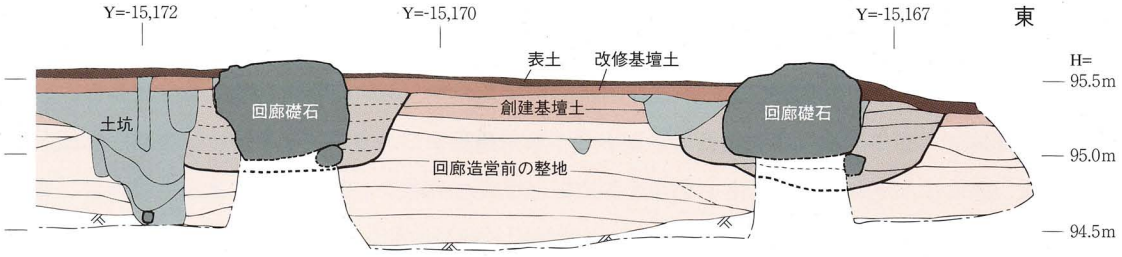
には玉石組雨落溝SD7516が残る。北面回廊は先述のように複廊であり、本調査では桁行２間ぶん（隅部を含まず）を検出した。柱間寸法は桁行4.16ｍ（14尺；奈良尺：１尺＝295㎜ほど。以下同）、梁行3.55ｍ（12尺）。なお、北面回廊と東面回廊の交差する隅部分の柱間寸法はすべて12尺である。一部で棟通り地覆石の残がいと考えられる流紋岩質凝灰角レキ岩（二上山～ドンズルボー産。以下、凝灰岩Aと呼称）片群SX7511を検出した。また、基壇南辺部には東西方向にならぶ角板状の流紋岩質溶結凝灰岩（奈良市地獄谷周辺産。以下、凝灰岩Bと呼称）列SX7518がある。据付埋土に焼土を含むことなどから、中世の遺構と考えられるが、位置的・高さ的にみて基壇外装や敷石とは考えにくく、あるいは階段にともなう施設かもしれない。北雨落溝SD7516は、南北両側石・底石とも人頭大の河原石でつくられ、溝幅は約45㎝。東行して東面回廊の東雨落溝につながるが、さらに延長して東僧房の西雨落溝にも連絡するようである。西端部には南側に面をそろえた花崗岩石列（SX7517）が南側石列を破壊して並んでいたが、これは近世以後の遺構である。また、SD7516の据付溝には瓦片や凝灰岩A片を含むので、創建当初はおそらく凝灰岩A製の雨落溝だったと考えられる。なお、回廊礎石から溝心までの距離は約2.12ｍであり、SD7516にともなう回廊の軒の出は7.2尺（現尺の７尺ヵ）とみることができる。また、回廊隅部には斜行溝SD7525があり、埋土から12世紀の土師器が出土した。この斜行溝の性格は不明だが、治承焼失後の基壇改修時における排水溝と考えておく。



第６図　回廊部分全景（南から）

第７図　北面回廊（東から）

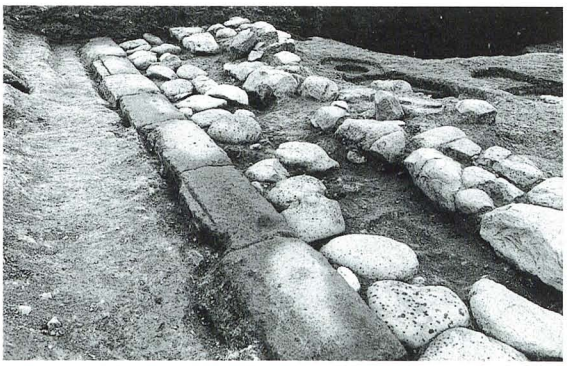
第８図　東面回廊棟通りの地覆石（南西から）



東面回廊SC7500　現地表下約25cmで遺構検出面である創建版築の上面に達する。東側の基壇外装・雨落溝は現代の排水溝によって大部分が破壊されているものの、西側にはよく残る。東面回廊は桁行７間ぶん（隅部を含まず）を検出した。柱間寸法は桁行3.77ｍ（12.7尺）、梁行3.55ｍ（12尺）である。棟通りには幅23～28cmほどの凝灰岩Ａ製地覆石を２列に並べており（SX7501）、間仕切り最下部を構成する地覆と地長押を受けるものと考えられる。一方、回廊基壇西側では基壇地覆石列SX7502と玉石組雨落溝SD7503、雨落溝外側の玉石敷きSX7504を検出した。SX7502は凝灰岩B製の切石で、幅が18～26cm、長さ40～60cm、厚さ約12cmをはかり、上面は平滑に仕上げていて、羽目石をのせる仕口などはみられない。SD7503は、SX7502を東の側石として溝底に河原石を２石ぶん敷き、西の側石にやや大きめの玉石をならべた溝で、底をSX7502の天端よりも約５cmほど低くする。溝底の標高は南が低いので、雨水は北から南に流れたと考えてよい。SX7504はSD7503の西側に約90cm幅で玉石を４～５石ぶんならべた石敷きで、西端の石は面をそろえて見切りとしている。これらは中門にとりつく南面回廊の調査成果とほぼ同じ状況であり、断面の観察でも創建当初まで遡り得ず、古い時期の改修と考えられる。ただし、後述するようにSX7504の下から足場SS7505の一つを検出している。これは玉石敷きをはずして足場をたて、足場を撤去後、再び石敷きを修繕した様相を呈しており、他の部分でも表面的にはわからない改修はあると考えるべきだろう。また、東面回廊東側の一部でも凝灰岩B製の基壇地覆石列SX7506と玉石組雨落溝SD7507を検出した。溝幅は42～45cm。雨落溝外側には回廊内にみられたような玉石敷きはないが、溝とほぼ同時期の造作とみられるバラス敷きSX7508を検出した。以上から東面回廊の基壇の出は約1.84ｍ（6.2尺）、軒の出は2.05ｍ（７尺）に復原できる。

足場SS7505・7515　抜取穴に濃赤色の焼土を多量に含む。基壇上だけでなく雨落溝付近にもあり、玉石敷きSX7504の下からも検出した。ほぼ10尺間隔で並ぶ。東面回廊にともなう足場をSS7505とし、北面回廊にともなう足場をSS7515とした。

土器埋納坑SX7520　東面回廊棟通り外側の４本の柱で囲まれたほぼ中央にある小穴。土師器２枚が重ねられた状態で出土し、土師器の年代観から、嘉暦焼失後の再建時における地鎮遺構と考えられる。


第９図　東面回廊西側の基壇周辺遺構（北東から）

第10図　東面回廊東側の基壇周辺遺構（北から）

(2) 中金堂前庭部

前庭部の旧地形は、中金堂院中軸線付近はほぼ平坦なものの、東面回廊に近づくにつれ徐々に地山が下がり、谷地形となる。遺構は中軸線付近においては地山直上にある凝灰岩Aが粉状にまかれたような整地土面で検出し、そのほかは地山上または谷地形を埋めた整地土上面で検出した。

仮設建物SB7530　前庭部やや内部に建つ桁行9間以上×梁行2間の掘立柱南北棟建物。柱間寸法は桁行方向が約1.9m、梁行方向が約2.8m。柱穴から12世紀の土師器皿小片が出土した。

仮設建物SB7531～7533　東面回廊に内接する位置に建つ桁行10間以上×梁行4間の南北棟建物。SB7531は掘立柱建物で、柱位置をほぼ同じくして掘立柱建物SB7532に建て替える。これらの柱穴からは12～13世紀の土師器皿が出土した。また、この2棟と柱位置を同じくする礎石建物SB7533がこの上層に建つ。SB7533の礎石据付掘形からは14世紀以降の瓦質土器が出土している。以上3棟は、いずれも身舎の梁行が2間で東西2面に庇がつく。柱間寸法は桁行方向が約2.8m、梁行方向が約1.9m、庇の出が約2.1mである。これらは南北に長い土坑SK7570より新しい。

仮設建物SB7534～7536　SB7531～7533と重複する位置に建つSB7534は、桁行9間以上×梁行4間（身舎梁行2間＋東西2面庇）の掘立柱南北棟建物。柱間寸法は桁行方向が2.0～2.7m、梁行方向が約2.1m。この建物の柱穴からは14～15世紀の土師器皿が出土した。さらにこれらと重複する位置に建つSB7535は、桁行7間×梁行3間（身舎梁行2間＋西庇）の掘立柱南北棟建物で、東庇がつく可能性もある。柱間寸法は桁行・梁行とも約2.1mで、西庇の出が約1.7m。柱穴は小ぶりでSB7530～7535のうちでは、もっとも新しい建物と考えられる。SB7536は前庭部東端にある桁行6間以上×梁行2間の礎石建南北棟建物。桁行・梁行ともに柱間寸法は約1.95m。調査区の南外でも礎石とその間にある地覆石状にならべた丸瓦列を観察できる。SB7536は明治以降の土坑SK7562よりも新しい。

SB7530～7535は、位置的・規模的にみても『春日社寺曼荼羅』（鎌倉時代。個人蔵；第12図）に描

第11図　中金堂前庭部全景（南西から）

(2) 中金堂前庭部

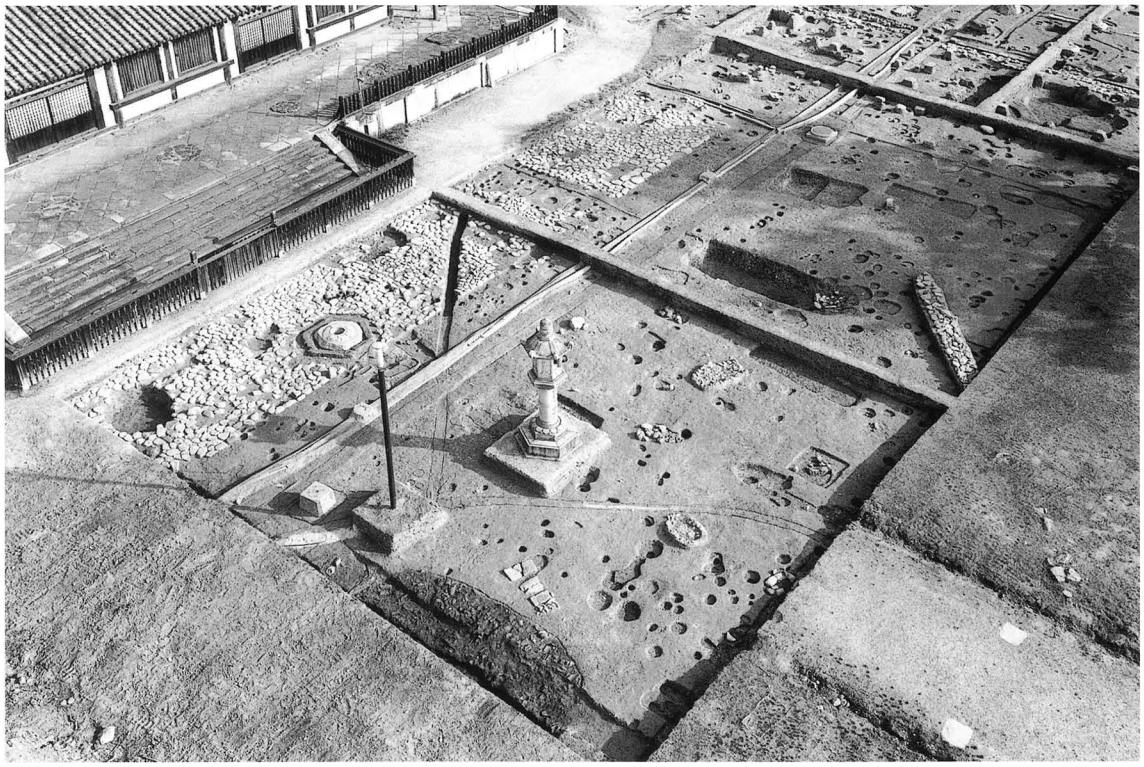
前庭部の旧地形は、中金堂院中軸線付近はほぼ平坦なものの、東面回廊に近づくにつれ徐々に地山が下がり、谷地形となる。遺構は中軸線付近においては地山直上にある凝灰岩Aが粉状にまかれたような整地土面で検出し、そのほかは地山上または谷地形を埋めた整地土上面で検出した。

仮設建物SB7530　前庭部やや内部に建つ桁行９間以上×梁行２間の掘立柱南北棟建物。柱間寸法は桁行方向が約1.9ｍ、梁行方向が約2.8ｍ。柱穴から12世紀の土師器皿小片が出土した。

仮設建物SB7531～7533　東面回廊に内接する位置に建つ桁行10間以上×梁行４間の南北棟建物。SB7531は掘立柱建物で、柱位置をほぼ同じくして掘立柱建物SB7532に建て替える。これらの柱穴からは12～13世紀の土師器皿が出土した。また、この２棟と柱位置を同じくする礎石建物SB7533がこの上層に建つ。SB7533の礎石据付掘形からは14世紀以降の瓦質土器が出土している。以上３棟は、いずれも身舎の梁行が２間で東西２面に庇がつく。柱間寸法は桁行方向が約2.8ｍ、梁行方向が約1.9ｍ、庇の出が約2.1ｍである。これらは南北に長い土坑SK7570より新しい。

仮設建物SB7534～7536　SB7531～7533と重複する位置に建つSB7534は、桁行９間以上×梁行４間（身舎梁行２間＋東西２面庇）の掘立柱南北棟建物。柱間寸法は桁行方向が2.0～2.7ｍ、梁行方向が約2.1ｍ。この建物の柱穴からは14～15世紀の土師器皿が出土した。さらにこれらと重複する位置に建つSB7535は、桁行７間×梁行３間（身舎梁行２間＋西庇）の掘立柱南北棟建物で、東庇がつく可能性もある。柱間寸法は桁行・梁行とも約2.1ｍで、西庇の出が約1.7ｍ。柱穴は小ぶりでSB7530～7535のうちでは、もっとも新しい建物と考えられる。SB7536は前庭部東端にある桁行６間以上×梁行２間の礎石建南北棟建物。桁行・梁行ともに柱間寸法は約1.95ｍ。調査区の南外でも礎石とその間にある地覆石状にならべた丸瓦列を観察できる。SB7536は明治以降の土坑SK7562よりも新しい。

SB7530～7535は、位置的・規模的にみても『春日社寺曼荼羅』（鎌倉時代。個人蔵；第12図）に描



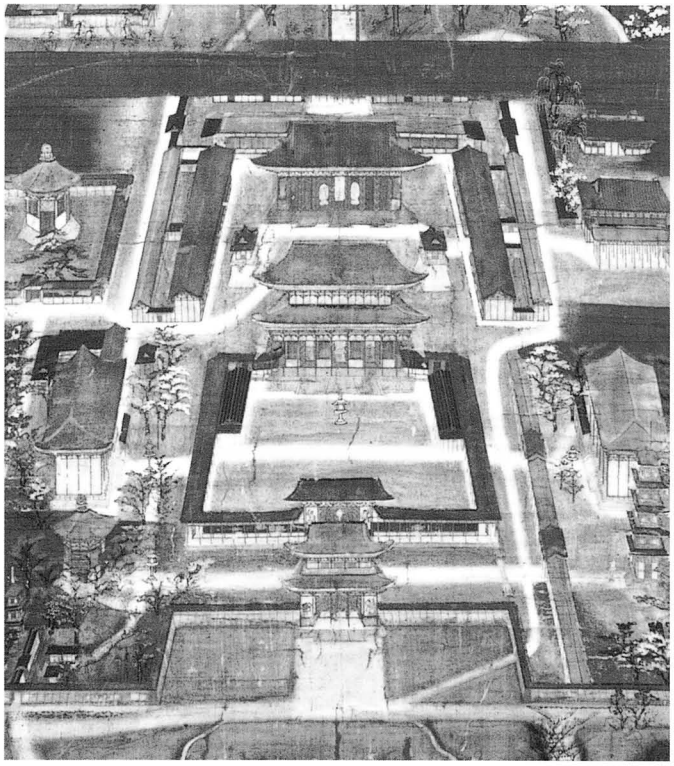
第11図　中金堂前庭部全景（南西から）

かれた中軸線を挟んで対称の位置にある南北棟建物にきわめて類似する。この絵図はどのような場面を描いたのか不明だが、永承元年（1046）火災後の復興記録である『造興福寺記』には、事始の儀式の際、東西回廊から約２丈（約６ｍ）はなれた前庭部に南北棟の幄舎を建てて造営関係の役人が座る場所としている。さらに、治承４年（1180）や享保２年（1717）の火災後にも同様の幄舎を建てて儀式をおこなっている（『興福寺伽藍地曳之図』：享保14年『興福寺伽藍再建事始地曳并法会之記』所収；『興福寺南円堂修理工事報告書』1996より；第13図）ので、本調査で検出したこれらの建物も、このような幄舎の可能性が大きい。なお『養和元年記』（治承焼失後の復興を記す）によれば、このような幄舎は「竹柱葺板上覆幔」とあり、竹柱で建てられ幔で覆われていた。

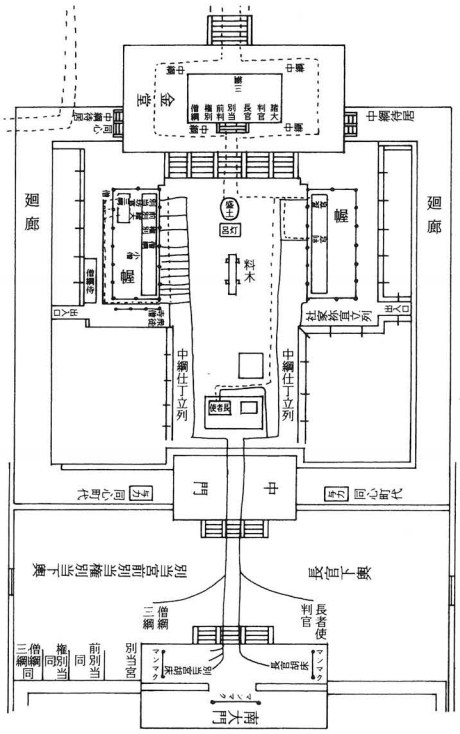
回廊内側では、上記の建物以外にも幄舎となるような掘立柱穴や礎石があり、火災後の復興の際には、ほぼ毎回同様な建物を建てて儀式をおこなっていたと推察される。なお、『春日社寺曼荼羅』に描かれた回廊内の建物は、絵の成立年代と土器の年代観からみて、SB7533もしくはSB7534とみられる。

石敷きSX7550　調査区北西部（中金堂南）にある玉石敷きの舗装。南端に見切りとなる石をならべており、これ以上南には続かない。西方は調査区外にのび、東方は現代の埋設管で破壊されていて、それ以東では検出できない。したがって東西の範囲は不明なものの、現時点ではちょうど中金堂基壇の前面だけに存在すると考えておく。断面観察の結果、この石敷きは地山直上のきれいな整地土上につくられた部分と、炭片や焼土を含む汚れた土の上につくられた部分とが各所に存在し、創建当初につくられたものが部分的に改修をくり返しながら存続してきたものと考えられる。参道部分を石敷きとする例は飛鳥地方の寺院跡で検出されているが、金堂前面のみを石敷きとするのは珍しく、回廊が中門と中金堂にとりついて閉じる点を考慮のうえ、今後この石敷きの意味や用途などを検討しなければならないだろう。

掘立柱東西塀SA7540　石敷きSX7550の約１ｍ南に位置する柱間約1.5ｍ（５尺）の掘立柱東西塀。SX7550東端以東には続かないため、これとほぼ同時期の遺構と考えられる。用途は不明。



第12図　『春日社寺曼荼羅』の興福寺部分



第13図　『興福寺伽藍地曳之図』

燈籠台石SX7545　中門と中金堂を結ぶ中軸線上、石敷きSX7550のなかにある花崗岩製の燈籠台石（第14図）。径は約1.4m。磨滅しているものの、八弁の蓮弁状繰形をもつ直径約95cmの突出部がある。その中央には直径36cm、深さ50cmほどの円形の穴を穿っていて、燈籠の竿石をこの穴にさしていたようだ。台石の周囲には、幅25cm、長さ1.0m、厚さ12cmほどの地覆石状に加工した流紋岩質凝灰岩（奈良市地獄谷周辺産。以下、凝灰岩Cと呼称）を六角形にならべている（SX7546）。この凝灰岩Cの据付穴埋土は焼土を含む汚れた土で、台石よりもあきらかに新しい。一方の燈籠台石据付穴は石敷きの下方にのび、拳大～人頭大の河原石のほか、凝灰岩B塊をも根石として使っている。この据付穴に切られて一部きれいな淡黄灰粘質土層があるので、これを当初の据付穴とみて、現在の台石は平安時代頃に据え替えたものと解釈した。また、台石には蓮弁の外側に現状とはまったく関係のない直線的な段差が4箇所残存し、それをつなぐと八角形に復原できるので、もともとは石を八角形に組んで縁部を固め、さらに竿石も八角形をなしていたのかもしれない。しかし、蓮弁状の装飾部分と、竿石をさして安定させる構造部分とが一体化して一石でつくるという手法は、飛鳥寺・山田寺の調査で検出した事例とは異なり、燈籠製作技術の変遷も含めて再検討しなければならないだろう。なお、この石自体や装飾部分の大きさなどから、建物の礎石に穴を穿ち、燈籠台石として再用した可能性があることも指摘しておきたい。

この燈籠の南には、中世頃の土坑があって、逆L字型をした凝灰岩B塊が廃棄されていた。これは一辺が60cm、厚さ15cmほどの板石で、本来は中央に約20cm角の穴をあけた石組みの構成部材と想定される。また、南北に長い焼土混じりの土坑が中軸線を挟んで2箇所に掘られている（1対でSK7542）が、燈籠の据付法に関係するものだろうか。一方、調査区南端の中軸線上にも拳大ほどの石を組んだ小燈籠の基礎と考えられる遺構がある（SX7555）。これは近世の遺構であろう。

瓦溜SK7560　調査区西端部にある焼土・炭片を多量に含む瓦溜土坑（第15図）で、創建期の軒瓦のほか緑釉水波文塼（口絵）が出土した。遺物の年代観から永承焼失後の塵芥処理用土坑であろう。

このほかにも前庭部では、大土坑（SK7564・7566～7569）や斜行石組み（SX7565）などを検出したが、早くても享保焼失以後であり、大土坑の多くは明治以後の遺構である。

第14図　燈籠台石とその周辺遺構（西から）

第15図　調査区西端にある瓦溜SK7560（北から）

(3) 東僧房付近

東僧房SB7590　調査区東北隅の壁際で東僧房の礎石を２石検出した。北の礎石は当初位置を保つが、南の礎石は北面回廊北側柱筋とそろえるものの、明治ごろにほぼ当初位置で据えなおされた痕跡がある。基壇はシルト質の地山削り出しで、現状では基壇の版築土を確認できない。基壇南側には幅32㎝、厚さ15㎝の凝灰岩A製地覆石列SX7591があり、基壇内側部分には羽目石ののる仕口を設ける。断面観察の結果、この地覆石は創建当初のものとみられる。また、礎石から約1.7ｍ西に凝灰岩A製の塊や小片がつまった南北方向の抜取溝状遺構SD7595があり、これが基壇西辺部の位置にあたる可能性がある。

明治期築地SA7620・7621　明治21年（1891）ごろ、奈良公園における興福寺の寺地が定められた際に設けられた築地塀。大石で積んだ基底部と瓦のつまった積み土を検出した。調査区東端から西へ約5.2ｍのびたあと、南に折れて約4.0ｍで切れる。それ以南はつくられた直後の明治28年に取り壊され、本調査で検出した部分も昭和36年（1961）に取り壊され、基底部だけが残ったものである（第17図）。

石組溝SD7623　東僧房の礎石から西へ2.6ｍの位置にある巨大な石を側石とする南北溝。現地表直下から掘り込んでおり、享保焼失後につくられた排水溝で、東僧房とは共存しない遺構と考えられる。

瓦溜SK7611　北面回廊SC7510の北方にある瓦廃棄土坑。奈良～平安初期頃の瓦のみ出土する。僧房は元慶２年（878）に焼失しており（『日本三代実録』）、それにともなう瓦廃棄土坑の可能性が高い。

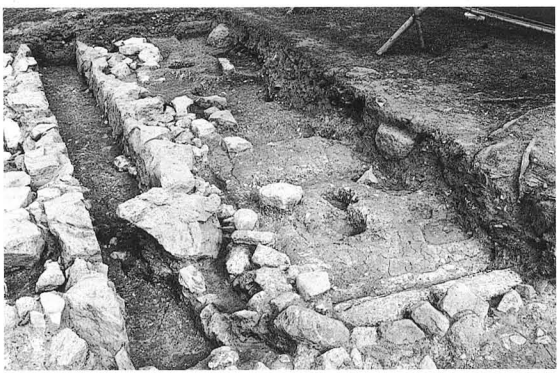
大土坑SK7606　東僧房の南にある円形の大土坑。平安中期～末期頃の瓦が出土し、治承焼失後の廃棄土坑と考えられる。

このほか、調査区南東隅付近にある近世の炭土坑SK7599からも多量の瓦が出土し、さらにその下層には土師器の細片と焼土を多量に含む土坑SK7598がある。

(4) 回廊造営以前の遺構

東西溝SD7600　北面回廊北側柱筋のやや南にあって地山を掘り込む素掘りの東西溝。幅は約60～80㎝、深さは部分的に異なるようで、深いところでは遺構検出面から30㎝ほど残る。溝埋土には流水にともなうような層はなく、しかも場所ごとに埋土も違っていて人工的に埋められたような様相を呈している。断面観察の結果、回廊創建当初の礎石据付穴より古いことが判明した。西方では中金堂もしくは回廊の基壇造成にともなうと考えられる地山削平によって溝も削られていて残らない。

東西溝SD7610　北面回廊南側柱筋のやや北にあって地山を掘り込む素掘りの東西溝。幅は約25～40㎝でごく浅く、東と西では地山とともに削平されてしまっている。これも回廊創建当初の礎石据付穴よりも古い。これら２条の東西溝は、溝幅の違いこそあれ平行しており、心心距離は約5.94ｍ（奈良尺20尺）をはかる。この２条の溝の解釈については21ページ以下を参照されたい。



第16図　東僧房付近の遺構（南西から）

第17図　明治期築地SA7620・7621（東から）

4　出土遺物

(1)　瓦塼類

出土遺物の大半は瓦で、軒丸瓦214点、軒平瓦362点、丸瓦約15000点、平瓦約17000点、鬼瓦３点、隅木蓋瓦１点、緑釉水波文塼24点などであり、興福寺創建期から江戸時代におよぶ(第18・19図)。

軒丸瓦　１は興福寺式6301A、２は6301D。6301は合計34点出土し、うち７点が6301A、５点が6301D。調査区西端の瓦溜SK7560からは6301が12点出土し、6301Aが２点、6301Dが１点。３は6271AでSK7560から１点出土。久米寺と同笵。１・３の瓦当裏面には布目を残す。6301Aの大部分には布目を残すが、２はヘラ削りが全面におよぶ。以上は興福寺創建期の瓦。そのほか奈良時代の瓦に、４（6235A、東大寺同笵)、５(6201A、元興寺同笵)などがある。６は瓦当裏面に布しぼり目(6')を残す一本作りの瓦。平安宮内裏に類例があり、出雲産か（『平安京提要』角川書店1994)。7は扁平な表現の複弁８弁蓮華文。共に平安中期。８・９は永承の火災以降、治承の兵火以前の瓦。10は擬複弁蓮華文。11は中房周囲に蘂をもつ蓮華文で、共に平安末期の瓦。12・13の三巴文軒丸瓦は14世紀代。13は北面回廊南の瓦溜SK7580出土。14は単弁12弁蓮華文で、北円堂では慶安年間修理時の瓦とする（『興福寺大湯屋・北円堂修理工事報告書』1966)。15はSK7560から出土した鬼面文軒丸瓦（口絵)。鼻を高く表現する。他に類例が乏しく時期不明だが、平安時代か。16は「興福寺」の文字を表す中世の文字文瓦。外区・周縁が剝離している。瓦当面中央に菊花状の刻印を押す。17は桐文軒丸瓦で、五七の桐を飾る桃山期のもの。文様は２種ある。回廊内側に散在して６点出土し、３点は金箔を残す。口絵にあげた金箔瓦の瓦当直径は約15cm、厚さ約2.6cm。金箔瓦は全国51遺跡から出土しており（第２表)、大和国からは初例である。

軒平瓦　18・19は興福寺式6671Aで創建期の瓦。20・21は6671E。6671は38点出土。うち6671Aと認定できるもの28点、6671Eが５点。今回出土した6671Aには顕著な笵傷は認められない。22は6739Aで西隆寺と同笵（『西隆寺発掘調査報告』1993)。23は6692Aで、大安寺、法隆寺（『法隆寺の至宝』15小学館 1992)に同笵品あり。24は重郭文6572。以上は奈良時代。25は対葉花文軒平瓦。曲線顎で全長が約42cmと長く、顎に朱がつく。26は均整唐草文軒平瓦。笵傷が著しい。これらは平安前期。27は永承再建期の軒平瓦。28は崩れた宝相華唐草文で、奈良市北小路遺跡出土品（『奈良女子大学構内遺跡発掘調査概報Ⅴ』1995)は同笵であろう。29は退化した唐草文軒平瓦。30は宝相華唐草文軒平瓦。31は巴文と珠文をかざり、上外区に珠文、下外区を鋸歯文とする。薬師寺304（『薬師寺発掘調査報告』1987）とは部位が異なるが同笵であろう。以上は平安後期。32・33は均整唐草文軒平瓦で、養和再建期。34は均整唐草文軒平瓦で、SK7580から４点出土。35・36・41・42は菊水文軒平瓦。37は四菱を中心飾りにもつ。38は連珠文軒平瓦。39・40は、「興福寺」の寺名を表す文字文軒平瓦。以上は中世。

鬼瓦　43は鬼面文鬼瓦の向かって左側部分。鬼面の周縁に連珠文と輻状文をめぐらす。厚さは約4cm。平安宮内裏から出土した鬼瓦は、周縁を複線鋸歯文・連珠文と面違輻状文で３重にかざっており（山本忠尚『鬼瓦』至文堂 1998)、今回出土した鬼瓦はその簡略形とみられる。平安時代のものであろう。

緑釉水波文塼　半肉彫りで水波文をあらわし、緑釉をかけた塼で、厚さは約1.5cm（口絵)。全形は不明。隅は直角をなすもの以外に70°前後、110°前後のものを含む。火を受けた痕跡が著しい。瓦溜SK7560から合計24点出土した。出土状況から創建中金堂に使用されていたものであろう。過去に東金堂から出土した緑釉水波文塼（『興福寺東金堂修理工事報告書』1940、『興福寺防災施設工事・発掘調査報告書』1978）に比べ、厚さが半分ほどの薄い作りである。　（千田剛道）

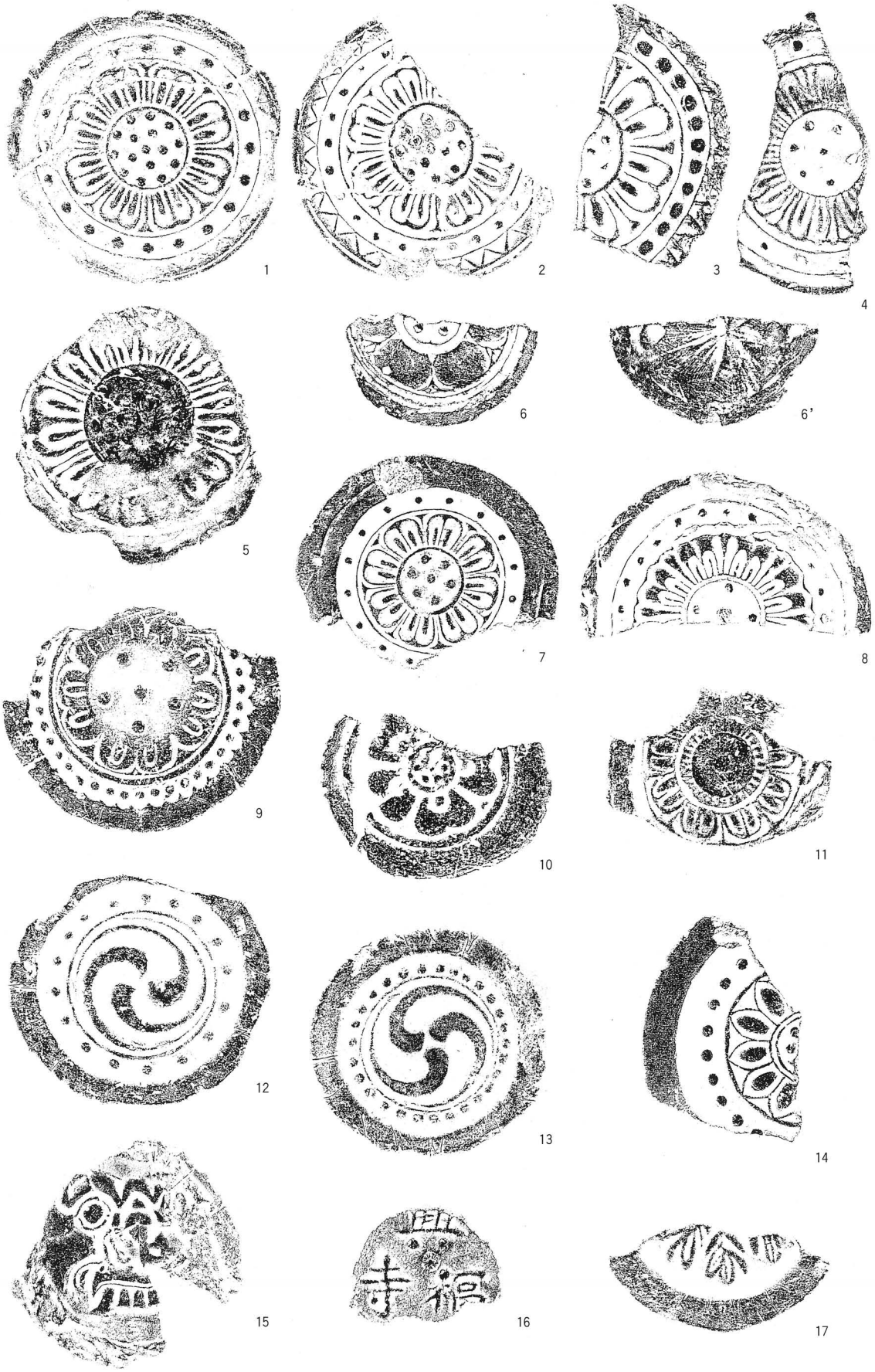
第２表　金箔瓦出土地一覧

	遺　跡　名（年代）	所　在　地	種　　別	備　　考
1	南小泉遺跡（慶長？）	宮城県仙台市	巴（本隅瓦？）	墓。若林城下町。
2	元袋遺跡	宮城県仙台市	巴	伊達家御仮屋跡か。
3	養種園遺跡	宮城県仙台市	菊花文	伊達家別荘小泉屋敷か。若林城下。
4	仙台城跡（慶長６～）	宮城県仙台市	桔梗、菊丸	漆付着鬼(桐、菊)、鯱、軒瓦あり。伊達氏。
5	福島城跡	新潟県上越市	軒丸？	詳細不明。
6	若松城跡（文禄元～）	福島県会津若松市	鬼（五七桐）	採集品。桐、菊文軒平。蒲生氏郷。
7	沼田城跡（天正18～）	群馬県沼田市	鬼？	真田信幸。
8	旧薩摩藩江戸屋敷	東京都港区	五七桐	
9	佐伯藩上屋敷跡	東京都千代田区	鬼？	毛利高政。
10	金沢藩下屋敷跡（元和？～）	東京都文京区	梅鉢、唐草、鯱ほか	五七桐軒丸あり。
11	甲府城跡（天正18～）	山梨県甲府市	鬼(五三桐)、鯱ほか	(豊臣秀勝)。
12	上田城跡（天正18？～）	長野県上田市	鬼、鯱、鳥衾（巴）	五七桐文鬼瓦。真田昌幸。
13	松本城跡（天正18～）	長野県松本市	飾り	五七桐軒丸。石川数正。
14	小諸城跡（天正18～）	長野県小諸市	五三桐、唐草	仙石秀久。
15	岐阜城跡（天正？～）	岐阜県岐阜市	巴、鯱	織田信忠。
16	金沢城下	石川県金沢市		中村博司氏ご教示。
17	駿府城跡	静岡県静岡市	巴	中村一氏。徳川家康。
18	名古屋城跡	愛知県名古屋市	巴	徳川義直。清洲城移築。
19	名古屋城御霊屋跡（延享２～）	愛知県名古屋市	鬼（丸に三葉葵）	
20	清須城跡（天正(14、) 18～）	愛知県清洲町	巴、唐草、飾り	(織田信雄)、豊臣秀次。
21	松ヶ島城跡（天正８～13）	三重県松阪市		織田信雄。
22	松阪城跡（天正13～）	三重県松阪市	軒平？	蒲生氏郷、松ヶ島城より移築か。
23	神戸城跡（天正８～）	三重県鈴鹿市	飾り？	織田信孝。
24	安土城跡（天正４～10）	滋賀県安土町	巴、唐草、鬼、鯱ほか	織田信長。
25	八幡山城跡（天正13～文禄４）	滋賀県近江八幡市	飾り（桐）	豊臣秀次。
26	彦根城跡（慶長14？～）	滋賀県彦根市	巴、鬼、鯱	井伊直勝、大津城より移築か。
27	金ヶ森遺跡	滋賀県守山市	菊花文、飾り	
28	観音堂遺跡	滋賀県草津市	鬼	
29	古屋敷遺跡	滋賀県大津市	菊花文	
30	大津城跡（天正14～）	滋賀県大津市	五七桐、鬼、飾り	豊臣秀吉。
31	聚楽第跡と周辺屋敷跡（天正13～文禄4）	京都府京都市	巴、梅花文、鬼ほか	豊臣秀吉。
32	伏見城跡と周辺屋敷跡（文禄２～慶長）	京都府京都市	巴、花文(桐)、鯱ほか	桐文は橋本関雪記念館蔵。豊臣秀吉。
33	豊国神社跡	京都府京都市	五七桐	妙法院蔵品は関連品か(中村氏ご教示)。
34	上賀茂神社	京都府京都市		中村氏ご教示。
35	北野天満宮	京都府京都市	梅鉢文	
36	離宮八幡宮	京都府大山崎町	巴、唐草、鳥衾、面戸	
37	興隆寺跡	京都府向日市	巴	
38	興福寺	奈良県奈良市	五七桐	
39	大坂城跡と周辺屋敷跡(天正11～慶長20)	大阪府大阪市	五七・五三桐、巴ほか	
40	堺環濠都市跡（慶長？）	大阪府堺市	巴	千利休屋敷隣接。
41	岡山城跡（天正18～）	岡山県岡山市	五七桐、巴、鬼ほか	桐文は伝世品。宇喜多秀家。
42	厳島神社千畳閣（天正15）	広島県宮島町	「王」文	豊臣秀吉寄進。
43	広島城跡（天正17？～）	広島県広島市	飾り（桐？）	毛利輝元。
44	江美城	鳥取県江府町	鯱	
45	小倉城跡（天正15～）	福岡県北九州市	鬼	桐文軒平瓦あり。毛利勝信。
46	永照寺跡	福岡県北九州市	鬼	中村氏ご教示。
47	名護屋城跡（天正18～慶長３）	佐賀県鎮西町	鬼、飾り(五七桐)ほか	豊臣秀吉。
48	日野江城跡	長崎県北有馬町	鳥衾(巴)	有馬晴信。
49	熊本城跡（天正16～）	熊本県熊本市	桔梗唐草	拓本のみ。加藤清正。
50	豊国神社跡	熊本県熊本市	巴	表採。加藤清正。
51	佐土原城跡（天正）	宮崎県佐土原町		島津氏。

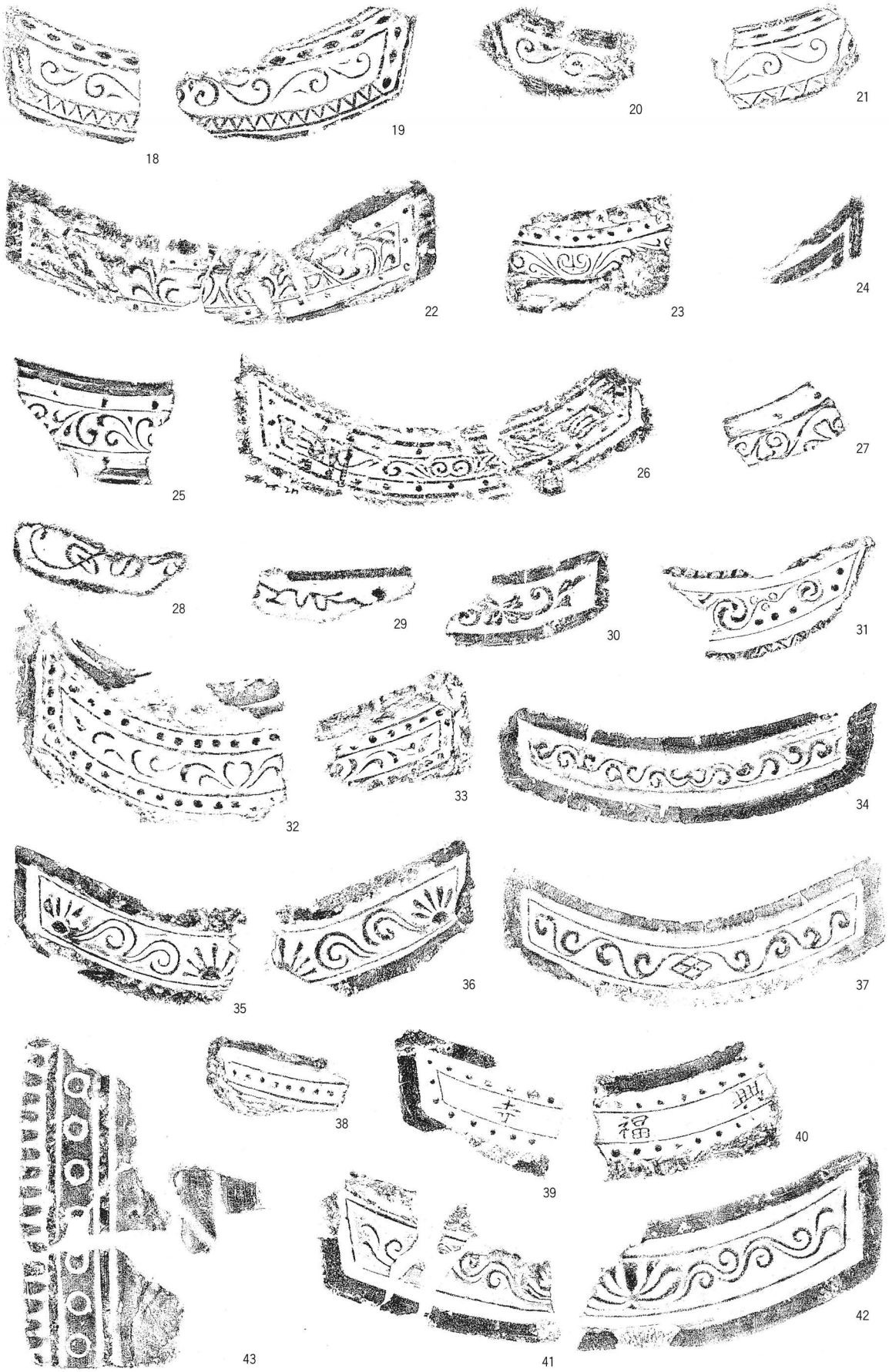
＊　桐文は花の数を示す。
＊　種別欄のゴシック体は軒丸瓦、明朝体は軒平瓦、丸ゴシック体はその他の瓦を示す。
＊　備考欄に記した瓦は文様に関する注釈で、金箔付きの瓦ではない。

参考文献
中村博司1978「金箔瓦試論」『大阪城天守閣紀要』６　大阪城天守閣 pp.16-26
中村博司1980「金箔瓦試論－補遺」『大阪城天守閣紀要』８　大阪城天守閣 pp.14-22
中村博司1995「金箔瓦論考」『織豊城郭』第２号織豊城郭研究会 pp.99-130
倉澤正幸1994「信濃における織豊期の城郭所用瓦の考察―上田城跡他出土軒瓦・金箔瓦の検討―」
『信濃』第46巻第９号 pp.29-45
田代　孝1992『開館10周年記念特別展 天下人の時代』山梨県立考古博物館

上表は以上の文献、その他の報告書等をもとに清野孝之が作成した。
このほか、以下の方々からご教示、また資料の提供を得ました。記して謝意を表します（敬称略・順不同）。
中村博司（大阪城天守閣）・青山 均（大津市教育委員会）・橋本眞次(橋本関雪記念館)・
古閑正浩（大山崎町教育委員会）・宮本佐知子（大阪市文化財協会）・山川 均（大和郡山市教育委員会）
中井　均（米原町教育委員会）・森島康雄（京都府埋蔵文化財調査研究センター）



第18図　出土軒丸瓦（1：4）



第19図　出土軒平瓦・鬼瓦（1：4）

(2) 金属製品・銭貨

金属製品　銅製品には、風鐸、飾金具、垂木先金具、歩瑶、鋲などがある。

風鐸は、中金堂前面にある石敷きSX7550上層の遺物包含層から破砕した状態で出土した。小片も含めて18点になる。全体の形状は不明であるが、乳の間とそれを区画する突線のありかたから、鐸身の一部と推定される(第20図)。厚さ4.0㎜～5.5㎜。鐸身は、幅３㎜、高さ２㎜の突線による１条の縦線と２条の横線により袈裟襷を構成する。区画された乳の間には縦３段以上の乳が配置される。乳は径8.5㎜、高さ８㎜の円筒形。裾部は、花弁状に大きく外反して広がるものと思われ、花弁の１単位は幅25㎝前後になる。裾端部は「く」の字に外方に屈折し、厚さ４㎜ほどの縁をつくる。

興福寺所用の風鐸としては、1955年の食堂発掘調査の際に、食堂西北隅の包含層中より笠形部分の破片が出土している（『興福寺食堂発掘調査報告』1959)。東金堂では、1937年の修理工事の時点で４隅の風鐸の半数の遺存が報告されているが（『興福寺東金堂修理工事報告書』1940)、本例は大きさ・形態からこの風鐸とちかいものであったと推定される。また、出土位置からみて中金堂東南隅に懸けられていた可能性がある。

この他の銅製品として、厚さ2.2～3.0㎜の平板な飾金具片がある(第21図)。蕨手状唐草文の主葉と子葉が相互に接する箇所の断片である。茎の幅９～11㎜。表面には文様を縁取る線彫がおこなわれ、透彫の側縁は、表面から裏面に開きぎみに落とす。遺物包含層出土。

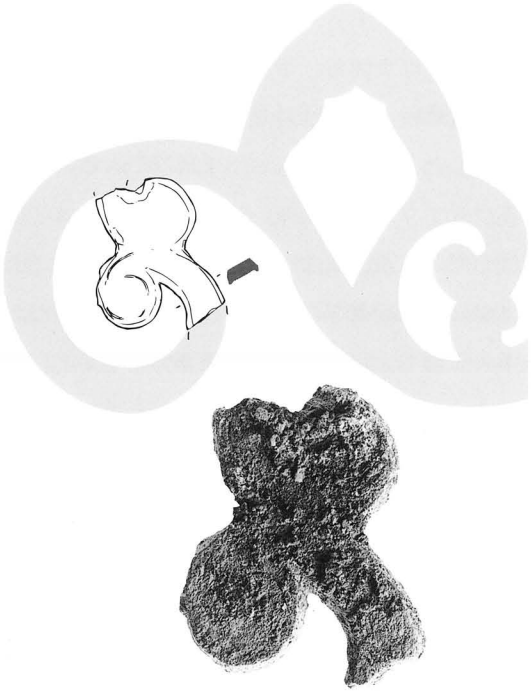
このような金具の類例に、奈良県大官大寺出土飾金具、大安寺出土飾金具がある。大官大寺例は、1974年の第１次調査で金堂（当初、講堂に比定されていた）基壇の東北隅および東南隅から出土した。出土位置と点数から隅木端の飾金具と考えられている。縦約42㎝、横約33㎝。厚さ２㎜の銅板の片面に文様を線彫し、その空間を透かしたものである（『奈文研年報』1975、岩本正二・西口寿生「飛鳥・藤原地域の出土遺物」『考古学雑誌』63-1 1977)。本例を重ね合わせると、唐草の茎の幅はほぼ一致し、同様の構成を取り巻きの強さ、向きの共通する箇所が４ヶ所ある(第22図)。本例の方が銅板が厚いこと、唐草の巻きがわずかに緩く、子葉部分も大きいため、文様構成自体がわずかに大きくなること、大官大寺例が巻きの先端を明瞭につくるのに対し、本例は玉縁状に丸くつくることなどの相違がある。

第20図　風鐸片（１：５、背景は東金堂風鐸）

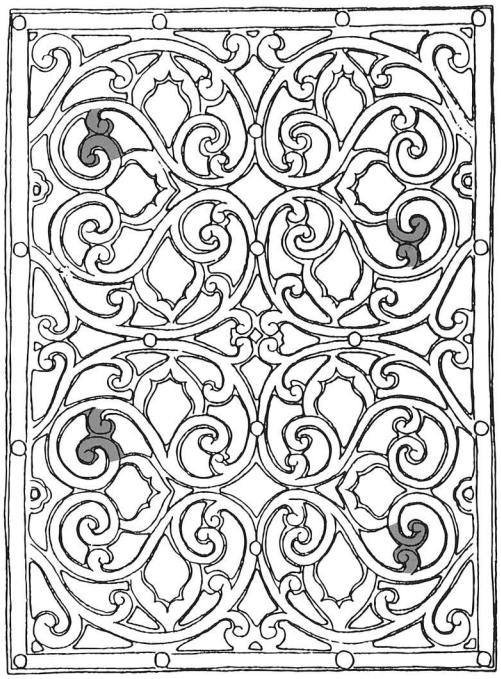
一方の大安寺例は、1966年の調査で金堂・講堂間に広がる焼土層から出土したもので、大官大寺例との類似が指摘されている(松村恵司「大安寺の金属製品」『大安寺史・史料』1984)。厚さが3㎜であることは本例に近いが、線彫のないことなどの相違がある。

垂木先金具は、いずれも小片であるが、円形金具の縁部分の破片が出土している。

鉄製品として、断片も含めると100点を超す



第21図　銅製飾金具（実測図１：２、写真１：１）



第22図　大官大寺隅木端金具復原図（１：５）

多量の釘のほか、鎹、火打金などが出土した。

銭　貨　表土からの出土が多く、寛永通宝20枚以上を含む近世以降のもの29枚が出土した。

その他　木製品の出土は、ごくわずかであるが、調査区西端の瓦溜SK7560からは部材片が出土した。２片に割れているものの、本来は同一のものと推定され、１辺が約９㎝の角材となる。長さ23.5㎝。樹種はスギ。石製品には砥石があり、SK7560などから出土している。

また、中金堂院の罹災を示す遺物として、火熱を受けて硬化した壁土片が11点出土している。第23図は、長さ8.5㎝、幅5.5㎝、厚さ5.2㎝の小塊で、１面が平坦になっており、本来の壁面の様子をうかがうことができる。平坦面は、厚さ5㎜の均質な乳白色の土層により形成され、上塗と考えられる。以下の層は小礫を含むなど土自体が粗做で、混和された苅材の痕跡が多数認められる。下塗あるいは中塗に相当しよう。被熱のため全体に橙褐色を呈し、黒色化した部分もある。北面回廊の北側柱筋上にある土坑SK7526から出土した。　（次山　淳）

第23図　火熱を受けた壁土片（約２：３）

(3) 土器

本調査では、整理箱で約20箱ぶんの土器が出土した。うちわけは土師器、須恵器、二彩・緑釉陶器、黒色土器、瓦器、瓦質土器、および陶磁器であり、年代は奈良時代～近代にわたる。ここでは遺構から出土した土器のうち、特徴的なものを示すこととする。特記したもの以外はすべて土師器である。

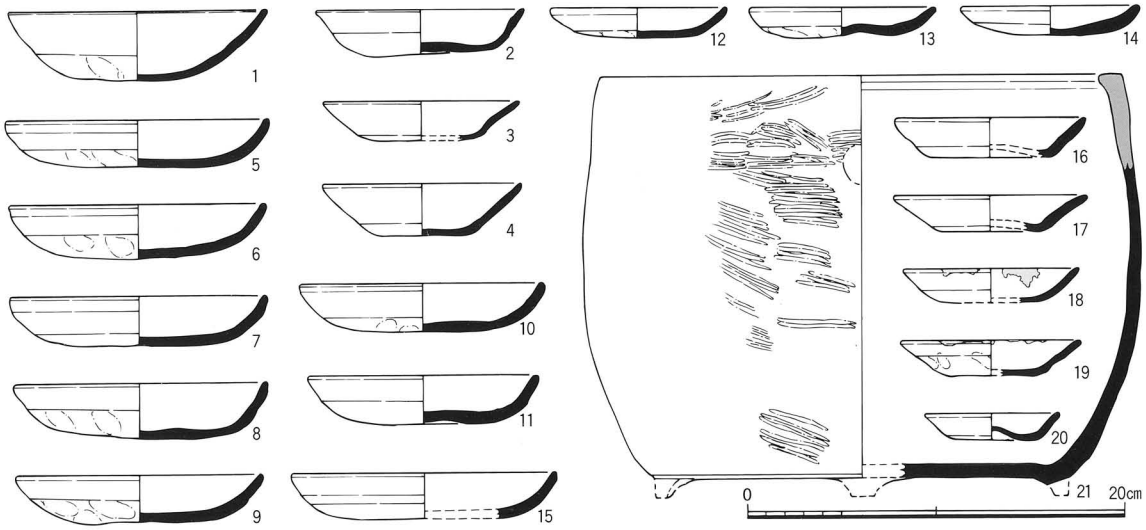
2は、北面回廊南側柱の隅を含め東から4個目の礎石据付穴より出土した皿。この位置の礎石は2度にわたって据え替えがあり、現状では2基の据付穴が重複しているが、双方とも埋土に焼土を含む。土器はそのうち新しい据付穴の東南隅部で、口縁部を上に水平にして納置されたような状況で出土したが、内部に埋納物の痕跡は認められない。赤褐色を呈する薄手の土器で、口縁部を強くヨコナデする。14世紀の年代が与えられ、嘉暦焼失後の再建にともなうものと考えられる。3・4は東面回廊東側柱の隅を含め北から5個目の礎石据替掘形から出土した皿。灰白色を呈し、口縁部外面を底部付近まで幅広くヨコナデする。14世紀の土器で、これも嘉暦焼失後の再建にともなうものである。

1・20は東面回廊基壇上の土器埋納坑SX7520から出土したもの。1は灰白色を呈する皿で、口縁部外面を幅広くヨコナデする。20は小型のへそ皿。ともにいわゆる白土器で、14世紀の年代が与えられる。嘉暦焼失後の再建時に基壇上に埋納したものであろう。

5～14は北面回廊基壇上の斜行溝SD7525出土。5～11は皿で、橙褐色を呈する。口縁部外面のナデは2段にわたって強く施し、口縁部下端が凹線状になるものもある。12～14は小皿で、褐色を呈し、口縁部外面を幅狭くヨコナデする。13・14はやや厚手で、口縁端部は丸くおさまるが、12は薄手で口縁部は強く外反する。これらは12世紀代のもので、治承焼失後の再建時に比定できる。

21は、東面回廊西雨落溝SD7503の凝灰岩製側石の抜取溝から出土した瓦質土器の風炉。同一個体の破片から図上復原したため、器高は推定である。胴部上半に穿孔をもち、外面全体に粗い磨きを施す。底部には低い足が付いていた痕跡があり、三足になると推定できる。内面上半には煤が付着する。還元が不足で、褐色を呈する。年代は14世紀後半以降であり、嘉暦焼失後の再建にともなうものであろう。

15～19は中金堂前庭部にある仮設建物の柱穴出土。15はSB7531・7532出土の皿。口縁部を2段にヨコナデし、12～13世紀頃のものであろう。16～19はSB7534出土の小皿。19は白土器、16～18は赤土器で、14～15世紀のもの。18・19は灯火器として使用する。その他、図示しなかったがSB7530から12世紀頃の皿小片、SB7533からは14世紀以降の瓦質土器の底部が出土した。　（玉田芳英）



第24図　出土土器（1：4）

5　成果と課題

本調査によって興福寺中金堂院の一様相があきらかになった。ここでは、ひとまず検出遺構・出土遺物についてのとりまとめをおこない、そのあとに若干の考察を付した。

(1)　本調査で得られた成果

回廊の形態を解明　中金堂院回廊は、部分的な改修があるものの、ほぼ創建当初の形態をとどめていることが判明した。とくに、礎石の大部分は創建当初から使われており、また基壇外装や雨落溝についても、ほぼ当初位置を守って改修されてきている。これまでの研究でも、興福寺における焼失後の復興にあたっては、ほぼ創建当初の規模を踏襲して堂塔を再建してきたことが指摘されており、本調査でもこのことを確認したことになる。なお、回廊全体の創建形態については後述する。

中金堂前庭部の様相を解明　前庭部分では再建工事にともなう儀式用の仮設建物を発見した。文献や絵画資料などによって、建物の存在は推定されたものの、発掘調査で確認したのはおそらく寺院跡でははじめてだろう。また、中金堂の南に石敷きの舗装を発見した。参道部分ではなく、中金堂前面を石敷きとする例は珍しく、前庭部分の使用方法や空間構成などについて、新たな資料を提供したといえる。この２つの発見は、伽藍建築だけの部分的な発掘調査では望めないことであり、寺院が生きていた証を解明しようとするならば、恒常的な建物のない部分の発掘もおこなうべきであろう。

東僧房の一部を検出　部分的ながら、東僧房の礎石と基壇地覆石を検出した。このうち基壇地覆石は、二上山産凝灰岩（本文中では凝灰岩Aとした）でつくられており、回廊部分ではみられなかった創建当初の基壇外装をよく残している。また、本調査によって東僧房付近の遺構も良好な遺存状況にあることが判明し、今後の調査にも期待をもてることがあきらかになった。

金箔瓦の出土　本調査では瓦をはじめとする多種多量の遺物が出土した。それらは現在整理中のため本書では簡単な紹介にとどめたが、奈良時代以来の法灯を保つ興福寺ならではの遺物も多い。そのなかでも注目すべきものは、大和国では初例、寺院跡からの出土でも全国２例目となった桃山時代の金箔付き軒丸瓦であろう。文様から豊臣家との関係は疑いなく、一方で同じ頃には興福寺の築地が大風で壊れている（『多聞院日記』）ことなどから、修造のために秀吉が寄進した瓦とする見解もある。しかし、それを論証するためには、近年めざましい進展をみせる金箔瓦研究のなかで、本調査で出土した金箔付き軒丸瓦の位置づけを明確にすることが先決であり、その作業は別の機会に譲りたい。

回廊造営以前の溝を発見　回廊造営以前の平行する２条の東西溝を発見した。詳細な検討は後述するが、結論を先取りすると、これは平城京三条条間南小路の南北両側溝に相当する可能性がある。条坊側溝とすれば、外京の条坊復原だけでなく興福寺の創建年代にかかわる大きな問題となる。興福寺の創建には藤原不比等が関与し、諸記録では平城京遷都当初とするものの、他寺の例からみて和銅末～養老頃と理解されている。ところで、この溝の心心間距離5.94ｍは小尺20尺とみてよく、和銅６年（713）２月の度量衡改正によって、条坊計画寸法が大尺から小尺に変更された後で造られたと考えられる。すると、回廊の造営ひいては興福寺の創建がそれ以降であると理解せざるを得ない。このため、養老４年（720）８月の藤原不比等没後、10月におかれた「造興福寺仏殿司」が興福寺造営の端緒とも考えられるが、今度は、不比等がどの程度興福寺造営に関与したのかが問題となってくる。元興寺・薬師寺・大安寺は遷都からやや遅れて造営が始まるものの、これまで寺域内で条坊側溝は確認されておらず、さまざまな研究分野で議論の対象となるべき重要な溝を本調査では発見したことになるだろう。

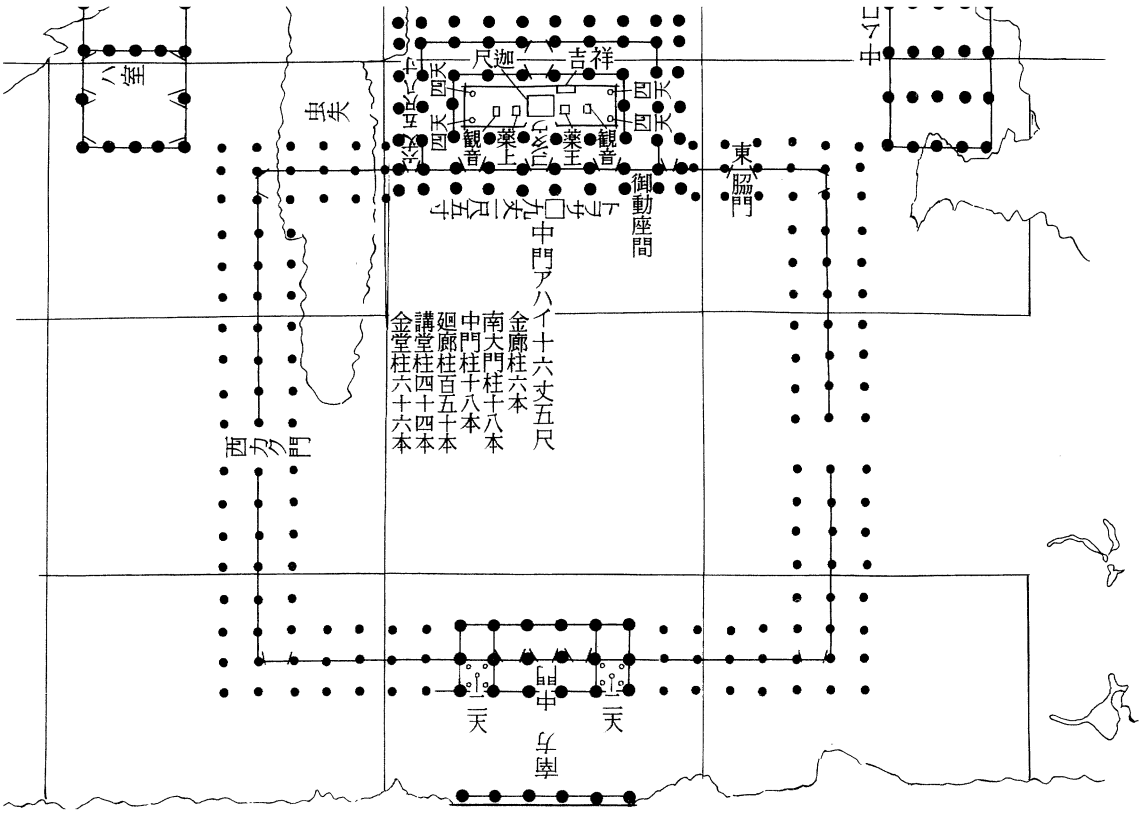
(2) 回廊の創建形態について

本調査によって北面および東面回廊北半の柱間寸法が判明した。しかし、この桁行寸法で東面回廊が調査区南外へ続いていたと考えると、『興福寺流記』に載せる東面回廊の全長（22丈２尺）と合わなくなるばかりか、昨年度発掘した中門の柱筋ともそろわなくなる。４ページで述べたように、大岡實は地上に露出していた回廊礎石の測量成果から同様な疑問を抱き、東面回廊の柱間は後世に変更されたと推測した。そして全長222尺をもとに、東面回廊南端付近に12尺の小門をおき、残る柱間12間を13.5尺等間に復原したのである。しかし、その推定は本調査によって全面的に見直さなければならなくなった。なお北面および南面回廊については、大岡も昨年度からの発掘成果とまったく同じ復原をしている。

ところで、中金堂院回廊の四面には中門のほかに門が２つずつ開くことが『興福寺流記』や『興福寺縁起』、その他の古絵図などによってわかっている。これは連子窓部分を扉とした穴門と考えられるが、今回の発掘調査ではその痕跡を検出できなかった。これは、おそらく遺構として残りにくい構造の門だったためと考えられる。

ここで興福寺蔵『肝要絵図類聚鈔』（15世紀；『奈良六大寺大観 興福寺Ⅰ』1969より；第25図）と東京国立博物館蔵『興福寺建築諸図』所収の回廊平面図（17世紀頃；第26図）という２枚の図面をみてみたい。享保２年（1717）に焼けた回廊は、嘉暦２年（1327）の焼失後に再建された回廊であるから、その間に改修された可能性があるとはいえ、この２つの図面は同じ時に建てられた回廊を描いたものといえる。そこでこれらを見比べてみると、発掘調査からはわからなかった小門の位置などはよく一致しており、少なくとも嘉暦焼失後に建てられた回廊とそこに開く小門の位置は確定するといってよい。

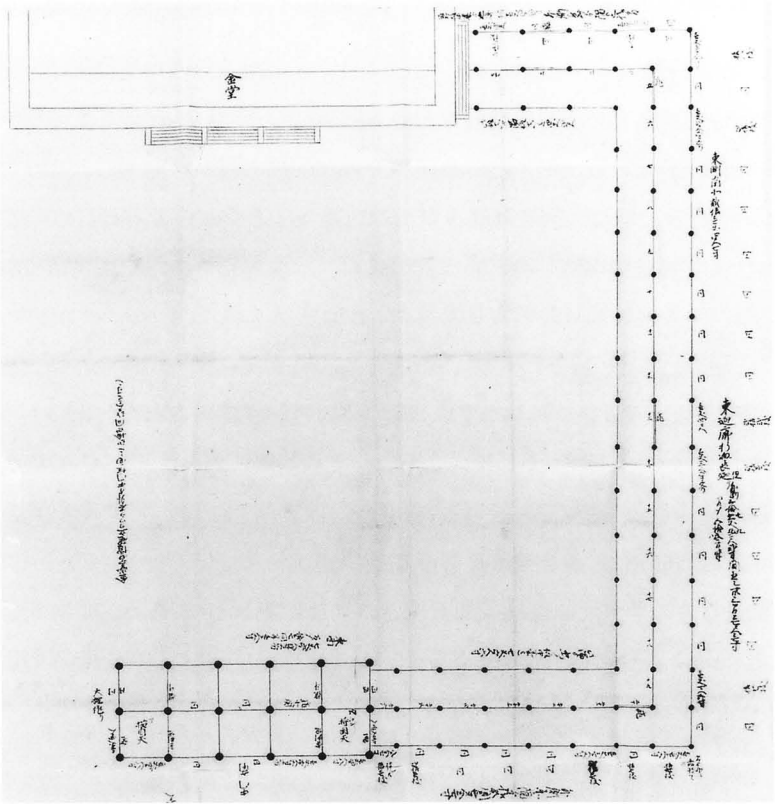
また、『興福寺建築諸図』所収の回廊平面図には柱間寸法の書き込みがある。本調査と関連する部分を記せば、北面回廊が「壱丈四尺」、回廊北東隅部分が「壱丈壱尺五寸」、東面回廊北半が「壱丈弐尺



第25図　『肝要絵図類聚鈔』中金堂院図の一部

五寸五分」と書かれている。これは現尺（１尺＝303㎜）であろうから、奈良尺（１尺＝295㎜ほど）に換算すれば、本調査の成果とおおよそ一致する。さらにこの絵図から、東面回廊中央付近には小門があり、その柱間寸法は「壱丈四尺」、その小門より南側の回廊は「壱丈三尺五寸□分」、東面回廊全長が「弐拾壱丈四尺七寸」であることが読みとれる。そのうち、全長（214.7現尺＝220.5奈良尺）については『興福寺流記』ほかの諸記録とほぼ一致し、昨年度の中門・南面回廊跡の発掘調査で得られた座標値から検討（全長約65.2ｍ≒221奈良尺）しても齟齬はない。さらに絵図の南面回廊の柱間寸法についても、昨年度の調査成果とよく合うのである。つまり、発掘調査で得られた数値的データは『興福寺建築諸図』所収の平面図とよく符合するといえる。２ヶ年にわたる南面および北面・東面回廊の発掘調査によって、回廊はほぼ創建期の規模を踏襲していると考えられるから、この平面図が創建当初の柱間寸法や門の位置を反映している可能性はきわめて大きい。したがって、微妙な寸法の誤差はともかく、中金堂院回廊の創建形態はこの平面図によって察することができるといって間違いあるまい。

以上から、東西対称と仮定して中金堂院回廊の創建形態を復原すると以下のようになる（第３表）。梁行寸法がすべて12尺等間（奈良尺、以下同）の複廊で、北面回廊は隅と中金堂とりつき部を除き桁行３間×14尺、中金堂からとりつき部を除き２間目に小門が開く。隅部分はすべて12尺等間で、第３表のように小門が開く。東西面回廊は隅を除き桁行13間で、北から８間目に小門があり、柱間寸法は小門部分が14尺、小門より北側が７間×12.7尺（≒89尺）、南側が５間×13.8尺（＝69尺）と小門の南側と北側での総長はほぼ完数値を示す。南面回廊は隅と中門とりつき部を除き５間で、柱間寸法は14尺等間である。すなわち、東西面回廊の小門の位置と規模を決定し、その南北を等間割りするという柱間計画のようだ。なお、昨年度の調査で中門とりつき部の回廊柱間は９尺と判明しており、ここから算定できる回廊の東西長を参考にすると、中金堂とりつき部は14尺と考えられる。　（箱崎和久）



第26図　『興福寺建築諸図』所収の回廊平面図

第３表　回廊の創建形態

中　金　堂	
東西全長　124尺	
北　面　回　廊	
	14尺　中金堂とりつき部
1	14尺
2	14尺（小門）
3	14尺
隅	12尺
隅	12尺
東 西 面 回 廊	
隅	12尺
隅	12尺（小門）
1	12.7尺
2	12.7尺
3	12.7尺
4	12.7尺
5	12.7尺
6	12.7尺
7	12.7尺
8	14尺（小門）
9	13.8尺
10	13.8尺
11	13.8尺
12	13.8尺
13	13.8尺
隅	12尺
隅	12尺
南　面　回　廊	
隅	12尺
隅	12尺（小門）
5	14尺
4	14尺
3	14尺
2	14尺
1	14尺
	９尺　中門とりつき部
中　門	
東西全長　78尺	

(3) 2条の東西溝の解釈

本調査では、北面回廊の基壇上で回廊造営以前の平行する素掘りの東西溝2条（SD7600・7610）を確認した。溝の心心間距離（5.94m）はほぼ20小尺にあたり、位置的にみても平城京三条条間南小路の両側溝に近いことから、興福寺造営に先行する平城京の条坊遺構ではないかと推測するに至った。興福寺造営に先行する条坊は、これまでの発掘調査では未確認であり、また、興福寺の寺地は平城京造営当初に定められ、寺域内に条坊は造られなかったという認識を覆すものとなる。これは興福寺の造営開始時期とも関連する大きな問題に発展するため、慎重な検討が必要となった。

検討の前提と条件　2条の溝は平城京内の検出事例からみても、小路側溝としての規模と形態を有しているので、条坊遺構であるか否かは、その位置が条坊に合うかどうかを見きわめなければならない。そのためには、本調査地にできるだけ近い位置で確認された条坊遺構との関係から、復原される条坊のふれと距離を検討すべきである。ところが、外京域における条坊遺構の検出事例は3例のみであり、そのうち東四坊大路に関する座標（市168次；1988、第4表の④）は、東西方向の条坊を検討する材料にはならない。したがって残りの2点と、平城京における条坊設定の基点のひとつとして扱われた可能性が高い、朱雀大路と二条大路条坊計画線との交点の座標（奈文研223-9次；1991、第4表の⑤）の、合計3点から検討したい。なお、計算にあたってはとくに断わらない限り1小尺＝0.2955m、1大尺＝0.2955×1.2＝0.3546mとして作業を進める。

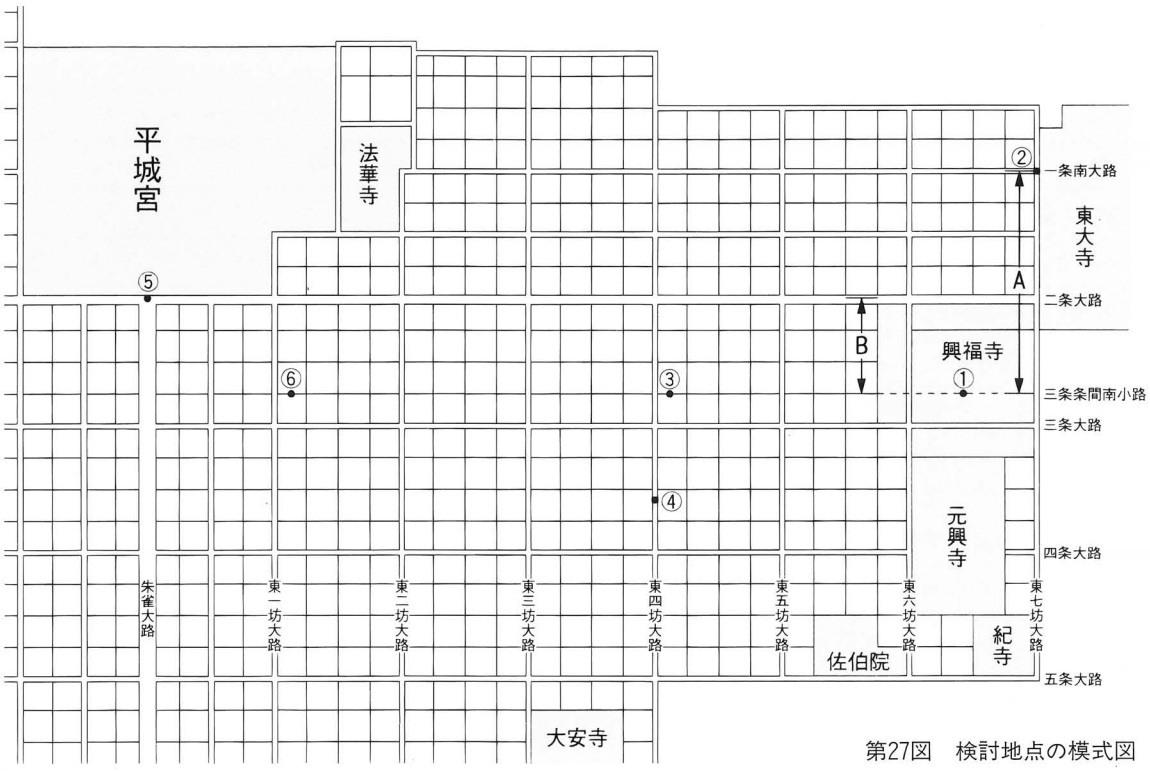
まず、今回検出した道路心の座標を①とした（第27図・第4表）。

②は転害門前における東七坊大路心の座標値である。この値の算出には、東大寺西面大垣の調査成果（奈文研174-10次；1986）を根拠として用いた。この調査では東大寺西面大垣と東七坊大路の東側溝西肩を検出しており、西側溝が未検出なものの、平城京における一般の大路の幅員は60大尺と考えられること、断面観察から推定される東側溝の幅は8尺程度であることなどから、西側溝も同規模と想定して当該位置における東七坊大路心を求めた（X＝-145,591.60、Y＝-14,872.00）。これを用いると、東七坊大路心から西面大垣心までの距離23.758mを得る。次にこの付近における東西方向の条坊位置は、奈良時代以来の原位置を保持し、一条南大路に心を合わせているという前提にもとづいて、現存する東大寺西面北門（転害門）から求められる。すなわち、転害門の心座標を1/1000現況図から計測し、これと東七坊大路心までの距離（23.758m）から、転害門前における東七坊大路心②を得たのである。

次に③は平城京左京三条五坊四坪（市84次；1985）の調査で検出した、三条条間南小路の南側溝心から求めた小路心である。これは小路の幅員を20大尺と仮定して算出した。

まず、②（転害門前東七坊大路心座標）と⑤（朱雀大路と二条大路との交点の座標）を使い、国土座標系に対する外京の条坊のふれを求めた。これは一条南大路と二条大路との関係であるから、条坊方向の南北距離は1条ぶん＝1,800尺×0.2955m＝531.9mとして算出した。その結果、ふれは0°06’43”となり、これまでに知られている平城京の条坊のふれ（15’～20’程度が多い）に比してやや小さいが、この値を用いて本調査で検出した道路心の位置を検討してみたい*)。

検討結果　②転害門前から①興福寺の条坊方向南北距離（第27図、A）は935.265mである。これを②－①間距離3,150尺（7坪ぶん）で割ると単位尺長（1尺）＝0.2967mを得た。同様にして⑤朱雀門前から①興福寺の条坊方向南北距離（第27図、B）403.358mを1,350尺（3坪ぶん）で割ると1尺＝0.2988mとなった。これらはいずれも奈良時代初期の単位尺長と考えられる1尺＝0.295m前後という



第27図　検討地点の模式図

第４表　検討地点の座標値

番号	X	Y	典　　拠
①	-146,416.05	-15,171.30	今回調査東西道路心
②	-145,480.20	-14,872.96	一条南大路と東七坊大路交点（今回計測、算出数値）
③	-146,412.56	-16,370.00	三条条間南小路心（市84次；1985）
④	-146,865.00	-16,457.20	東四坊大路心（市168次；1988）概報図面より計測
⑤	-146,019.35	-18,586.20	朱雀大路と二条大路条坊計画線との交点（奈文研223-9次；1991）
⑥	-146,420.43	-17,991.40	三条条間南小路の南側溝心（奈文研174-10次；1986）
①'	-146,419.02	-15,169.20	今回調査東西道路の南側溝心
③'	-146,416.10	-16,370.00	三条条間南小路の南側溝心（市84次；1985）

数値に比してやや大きい。ちなみに1尺＝0.2955ｍとして②転害門前から本調査地における三条条間南小路心を求めるとX＝-146,411.61となり、①の北4.44ｍの位置と算出される。

次に、もう一つ既往の条坊データとして左京三条二坊三・四坪間の小路南側溝心（⑥＝三条条間南小路の南側溝心）を用い、③地点における南側溝心（③'）、①今回調査地の南側溝心（①'）の３者のふれをみてみる。⑥－③' 間は東で北へ０°09' 11" のふれであるのに対して、③'～①' 間は逆に東で南に０°08' 22" のふれとなる。ちなみに⑥－③' 間の振れ０°09' 11" をそのまま東へ延ばし、今回調査地における小路南側溝心を求めると、X＝-146,409.92となり①' の北6.13ｍの位置となる。

以上のように、条坊が規則正しく施工されたと考えると、今回の遺構は本来の三条条間南小路よりも4.44～6.13ｍ南に寄った位置で検出されたことになる。しかし、このことは必ずしも先行条坊である可能性を否定するものではない。外京における検出事例が少なく、本報告でも前提となる材料に推測が加わっているのであるから、現時点ではむしろ、三条条間南小路に近い位置にあり、溝心心間距離20小尺が小路にふさわしい規模であるという事実に注目すべきと考える。そして、興福寺境内地における今後の発掘調査では、先行する条坊遺構の存在を考慮する必要が大いにあるだろう。　（高瀬要一）

*) 平城京における条坊のふれに関しては、これまでに数多くの数値が算出されている。主たるものに、『平城京朱雀大路発掘調査報告書』（奈良市1974）、武田和哉「平城京外京条坊制考」（『奈良古代史論集』３　1997）、井上和人「平城京羅城門再考」（『条里制古代都市研究』14　1998）などがある。

報告書抄録

ふりがな	こうふくじ　だいいっきけいだいせいびじぎょうにともなうはっくつちょうさがいほう　に
書名	興福寺　第１期境内整備事業にともなう発掘調査概報　II
副書名	
巻次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	箱崎和久・田辺征夫・高瀬要一・千田剛道・玉田芳英・山下信一郎・清水重敦・次山　淳・清野孝之
編集機関	奈良国立文化財研究所
所在地	〒630-8577　奈良県奈良市二条町２丁目９－１　Tel　0742-34-3931
発行者	興福寺
所在地	〒630-8213　奈良県奈良市登大路町48番地　Tel　0742-22-7755
発行年月日	西暦　2000年　３月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 m²	調査原因
興福寺（こうふくじ）	奈良県奈良市（ならけんならし） 登大路町（のぼりおおじちょう）	29201	—	34度 40分 48秒	135度 51分 46秒	1999.10.4 ～ 2000.2.16	1,485	境内整備

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
興福寺	寺院	奈良時代 ～ 明治時代	回廊 僧房 幄舎 石敷き 燈籠 瓦溜 廃棄土坑	瓦 土器・陶磁器 金属製品 銭貨	中金堂院回廊の東北隅部分を検出し、回廊の創建形態を解明した。 前庭部において、仮設建物（幄舎）跡・石敷き・燈籠台石などを検出し、前庭部の様相を解明した。 回廊に先行する東西溝２条を検出し、平城京の条坊側溝に相当する可能性があることを示唆した。

2000年３月20日　印刷
2000年３月31日　発行

興　福　寺

第１期境内整備事業にともなう発掘調査概報　II

編　集　奈良国立文化財研究所
発　行　興　福　寺
〒630-8213　奈良市登大路町48番地
印　刷　(有)関西プロセス